

民俗仏教にみる「死者」への祈り

——遺影を手がかりに——

鈴木 岩 弓

(東 北 大 学)

1. 問題の所在

本稿においては、現代日本の家庭においてしばしば見受けられる遺影を飾る習俗に着目し、そこで執り行われる行動を通じて、「民俗仏教」における「死者」への祈りの意味を考えてみたい。

ここで用いる「民俗仏教」という用語は、さまざまな仏教經典に基づく「正統な仏教」の教えとは必ずしも相容れない行動様式をも包含する、いわば一般庶民の間で実際に信仰されている“活きた”仏教を意味する。

仏教のみならず、宗教と呼ばれる現象には全て、一方の極には教義を厳格に護持する立場がある一方で、もう一方の極には教義による生活規制が非常に緩やかな立場があることが知られている。日本に宗教学を開いた姉崎正治は、そのことを「正統宗教」および正統宗教の変化・曲解・混淆からなる「民間信仰」という二重構造でとらえている。⁽¹⁾ 前者を対象に、いわば *sollen* を志向する宗教研究の立場は一般には「神学」と呼ばれるが、後者の研究はそれとは違って *sein* に注目して行う「宗教学」の立場である。従って研究対象となる具体的な信仰現象が教義といかにかけ離れた形態をとろうとも、その部分に対して価値観をもった判断を加えるのではなく、それを現実の信仰のありのままの姿として受け入れ、その意味を追究

しようとする事となる。ここでいう「民俗仏教」研究の意義も、その点にある。

近年の仏教研究の中でも、かかる観点からの研究が盛んになっているが、その中では佐々木宏幹の「生活仏教」論が代表格である。とはいえここで使用する「民俗仏教」は、佐々木とは若干立場を異にしている。佐々木は「生活仏教」を「実際の宗教生活にあつては教理と民俗の狭間に立つて活動する僧職者と、すでに仏教の影響下にありつつも民俗寄りに活動する民間（俗）宗教者、およびその両者に関わる檀信徒や一般人の三項がさまざまに関わり合う場面」と説明する。⁽²⁾しかしこの考え方からするなら、僧職者・民間（俗）宗教者・檀信徒や一般人といった「社会的役割」が、教理と民俗とを結ぶ線上にある程度予断をもって位置づけられているように思われるからである。筆者は、そのような教理と民俗との間の位置は、社会的役割において固定化されるようなものではなく、それぞれの役割を超えた個人の内面レベルにおき、時と場合に応じて常に変化しているものではないかと考えている。⁽³⁾僧職者は僧職者で、民間宗教者は民間宗教者で、そして檀信徒は檀信徒で、それぞれ時に応じて教理と民俗の間を揺れ動いていると考えるのである。本稿において「民俗仏教」の語を用いるのは、そのような観点の違いがあることを示すためで、用語法に関しては固執しているわけではないが、その観点の違いは大きな差異であると考ええる。

2. 現代日本人と民俗仏教

わが国では「葬式仏教」の語が示すように、近世以来葬儀と仏教が密接に結びついて機能してきた。現代の葬儀全体に占める仏式葬儀の割合は、日本消費者協会の調査結果からみると、1995年の94.1%が2003年には95.0

%に漸増していた。これを20年以上前の1980年が93.8%（主婦連合会調べ）であったことと考え併せるなら、わが国の葬儀は、今なお仏教の影響力のもとで行われているといっても過言ではあるまい。それ故このような実態を外国人が見たならば、一言で「日本人は仏教徒である」と結論づけるかもしれない。

しかしこれまた新聞などの調査結果によるなら、日本人の中で、自覚的に自分の宗教をもっていると回答できるのは、概ね30%ほどの人々にすぎないとの報告がある。⁽⁴⁾仮に自覚的に自分の宗教を回答できる人々が全て仏教徒であったとしても、高々三割の人々だということである。

以上のようなギャップのあることを踏まえた上で、この章では現代日本人の仏教的行動に着目し、「民俗仏教」の実態を明らかにしたい。ここで使う資料は、筆者が行った科学研究費による全国規模の宗教意識調査の結果である。この調査は、2003年の2月に質問紙を用いたアンケート調査として実施された。その結果全国から2000人のサンプルを抽出し、1409の有効回答を得た。⁽⁵⁾ここでは主に、このときの調査結果と、これまでさまざまな機関で実施してきた同様な質問項目の調査結果を比較することで、“現代”を浮き彫りにしたい。

(1) つきあいのある寺

現代日本人は、現実にどの程度寺との“繋がり”を意識しているのだろうか。そこで「あなたには、葬式や法事を依頼する、昔からつきあいのあるお寺がありますか、ありませんか」と尋ねてみた。

結果は「ある」が62.5%、「ない」が32.6%となり、全体の三分の二近くが肯定的回答であった。「ある」について都市規模別で見ると、大都市（53.0%）・人口10万人以上の市（58.3%）・人口10万人以下の市（67.2%）・

町村（76.5%）となっており、一見、都市規模が大きくなるほどつきあいのある寺をもつ率が減少する傾向が見えてくる。しかしこれを大都市圏ごとに見ると、首都圏（44.5%）が最も低く、大阪圏が57.4%であるのに対し、名古屋圏では74.1%と高率を示している。ちなみに地域別では四国（82.2%）が飛び抜けて高く、以下東北（78.2%）中国（77.6%）と続き、最低の関東（49.6%）は逆に半数を割っている。以上より、つきあいのある寺が「ある」のは、一般には都市規模が大きいほど低いが、これは絶対的傾向ではなく、地域的差異が無視できないものといえよう。

しかしこれを年齢別にみていくと、50～59歳（69.2%）、60歳以上（76.6%）と高齢ほど「ある」が増えていくのに対し、40～49歳（58.4%）、30～39歳（52.5%）、20～29歳（40.1%）と、50歳を境にして、低年齢になるほど寺との関係が希薄になる傾向が窺える。ただこの動向を見る際には、回答者の家庭における位置が問題であろう。というのは、この数字に示された結果は、回答者自身がある程度“主体的”に寺とのつきあいを判断した結果が示されているものと見なされるからである。それ故に、例えばイエに檀那寺があったとしても、そこでのつきあいが親の役割と考えられている場合には、子供にとっての“自覚的つきあい”は希薄なのである。子・孫と同居する三世代家族の戸主の86.0%が「ある」と回答している一方で、職業が「学生」の55.6%が「ない」と回答していることが、そのことを示していよう。家族生活に見られる役割分担の一般的風潮として、寺との関わりはイエを代表する高齢者に任される傾向が高いため、結果として若い家族構成員からみると寺は縁遠い存在と映っていることが窺われる。

ただここで注目すべき点は、現在「ない」としながらも「昔はあった」とする回答が全体で4.5%あったことである。数からすれば微々たるものであるが、これを特に都市規模、転居経験、住居形態の資料と考え合わせ

るなら、大都市への人口移動者のうち、とりわけ借家住まいの層に、故郷の寺との関係が切れてしまう「寺離れ」の動きが指摘できる。

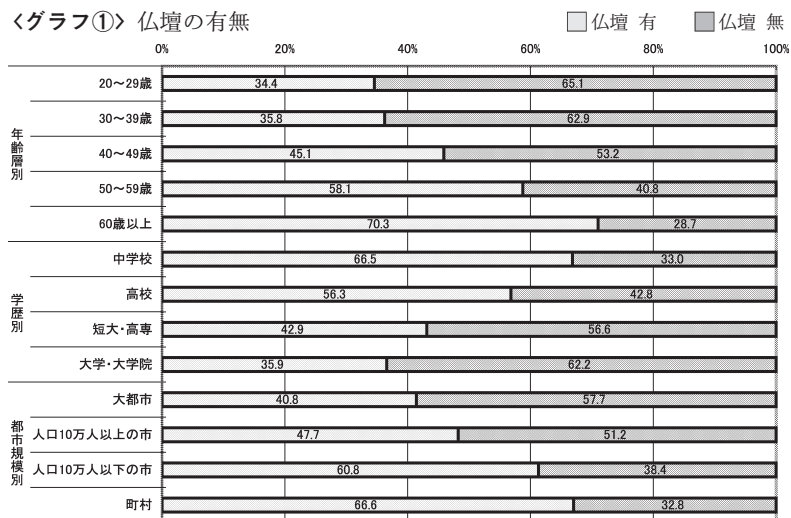
(2) 仏壇の有無

仏壇の有無については、「ある」が52.4%「ない」が46.6%となる。同様の質問は、これまで他機関の宗教調査の中でも扱われてきた。『朝日新聞』の1981年に実施した調査結果では、「ある」が61%「ない」が39%で、この二十年余りの間に、仏壇所持の割合が10%ほど減少し、逆にもたない割合が同程度増加して、次第に半数に迫っていることが窺われる。

参考までに神棚の有無は、「ある」が46.6%「ない」が53.3%となっており、現在では神棚をもたないイエが既に過半数を超えていることがわかる。これをさらに仏壇と神棚両方の所持状況として整理すると、仏壇も神棚も無い家庭が全体の35.0%に及んでいた。仏壇と神棚は、一般には家庭内で行われる宗教的行動の中心と考えられていることから考えると、少なくとも仏壇や神棚を通じた伝統的な宗教からの脱宗教化の波が確実に進んでいることが見えてくる。

今回の調査結果から明らかになる仏壇の有無を、年齢層別・学歴別・都市規模別に見ると〈グラフ①〉となる。まず年齢別に見ると、五十歳を境にして有無の割合が逆転している。即ち若い層ほど仏壇をもたず、逆に年をとるほど所持の割合が増加するのである。次に学歴別の場合は、中学卒では六割を超えて所持率が最も高く、高学歴化するほどもたなくなる傾向にある。そしてまた居住する都市規模別については、規模が大都市になるに従い所持率の減少傾向が明らかになった。これらのことより、都市部に住む高学歴で四十代以前の世代層の日常生活では、仏壇との関係が一般に希薄であることが指摘できよう。

〈グラフ①〉 仏壇の有無

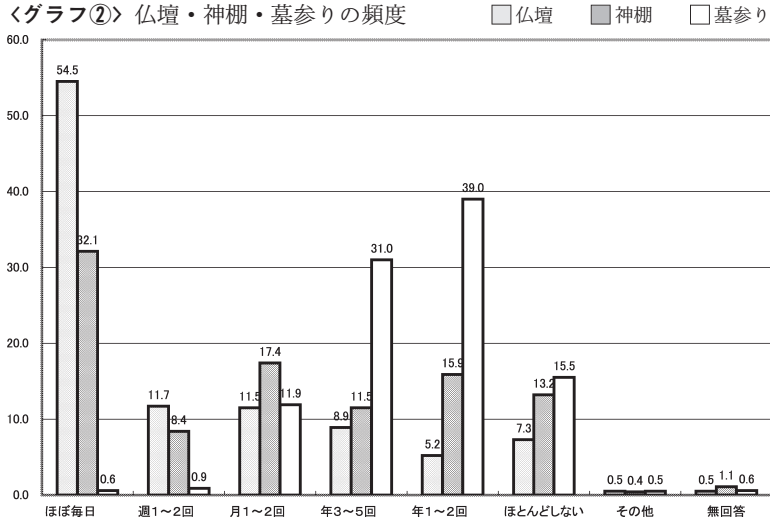


(3) 仏壇への関わり

では実際、人々は仏壇にどのくらいの頻度で関わっているのでしょうか。このことに関する全体的な比率を、神棚と墓への関わりとのデータと併せて示したのが〈グラフ②〉である。何れも所持者に限った行動としてまとめたものであるが、「ほぼ毎日」とする回答は仏壇（54.5%）が半数を超えたのみで、神棚は32.1%、墓参りは0.6%であった。これに対して「関わらない」とする回答は、仏壇が7.3%、神棚が13.2%、墓参りが15.5%であった。これより同じく宗教的行動といっても、家庭内においては、仏壇への関わりが最も頻度の高いものであることが明らかになる。

そこで次に、仏壇に「ほぼ毎日」関わる人々とはどのような人であるかを見てみよう。今回の調査で、回答者の基本的属性を知るために用意した性別・年齢・職業・学歴・居住形態などの質問と関連させ、その割合の高いものから取り上げてみると、以下ようになる。

〈グラフ②〉 仏壇・神棚・墓参りの頻度



既婚死別 (87.9%), 女性60歳以上 (81.4%), 自由業 (78.6%), 女性50～59歳 (72.5%), 専業主婦 (70.5%), 一人暮らし (70.5%) 本人・子・孫同居 (69.7%), 家族従事者 (67.6%), 無職 (67.4%), 中学卒 (69.3%), 女 (65.2%)

これより毎日仏壇に関わる典型像として, “夫に先立たれた一人暮らしの老婆” が浮かんでくる。身近に死者を経験することが, 仏壇祭祀の基盤にあるといってもよからう。このようなタイプの仏壇への関わりは, ある意味で近年までの日本社会において典型的になされてきた死者への関わりといえることができるかも知れない。

なお今回の調査では, 仏壇をもっていなくても代替え機能を果たす環境があるか否かを確認した。即ち「仏壇はないが, 位牌等を飾っている」といった選択肢を設けたのである。この結果, 5.2%が仏壇とは異なる〈場〉において, 仏壇と同様な関わりをもっていることが明らかになった。これ

を職業別・居住形態別にみると、専門職（14.0%）、公団・公営住宅居住（14.7%）が高い値を示し、首都圏でみると8.3%になっていた。ここから、都市生活者の間で、伝統的な仏壇祭祀や神棚祭祀とは違った形態で神仏と関わりをもとうとする動きの萌芽を見ることができる。

以上、民俗仏教の実態を「つきあいのある寺」「仏壇の有無」「仏壇への関わり」の三方向から探ってみた。その結果現代日本の民俗仏教は、一方で伝統的な地域文化の規制を受けながらも、他方で都市化というそのような文化的規制を解体するような関わりの希薄化を生じていることが明らかになった。⁽⁶⁾ただそのような中、従来の枠組みとはズレた形の新たな民俗仏教が生じつつあることも確認できた。かかる動向の一例として、以下、遺影について見ていくことにしよう。

3. 遺影との関わり

ここでは、東北大学と宮城学院女子大の学生を通じて昨夏収集した、人物写真を飾る習俗に関する調査結果を見ていくことにする。調査対象となったのは、東北地方を中心に遠くは九州に至る、日本全国の総計255戸である。このうち何らかの形で人物写真を飾っている家は247戸、全く飾っていない家は8戸で、全体の96.9%の家において人物写真が飾られていた。収集された人物写真の総数は、574点にのぼる。⁽⁷⁾すなわち、一戸あたり平均2.3枚の人物写真が家の中のどこかに飾られている計算である。この結果から見る限り、現代日本の社会においては、人物写真を身近に飾ることは、当たり前前の習俗ということができる。

ならば、そこに写っている人物は一体誰なのであろうか。結果は予想通り、近い親族が圧倒的に多かった。ただし本稿での関心は、写真に写る人

が生者か死者かという点にある。そこでまずこの点から整理するなら、死者が221枚（38.5%）であるのに対し、生者は353枚（61.5%）であった。このことが示すように、現在、日本の家庭内で飾られている人物写真の六割ほどは、生者で占められていることになる。⁽⁸⁾

では死者の写る221枚の写真は、一体どこに飾られているのであろうか。その典型的な場所の一つが仏壇の中、あるいは仏間の鴨居の上などである。今回の調査では、仏壇の中もしくは仏壇のある部屋の壁などに飾ってある場合は半数の112枚（50.7%）であった。そして残りの109枚（49.3%）は、仏壇のおいてある部屋とは別の部屋に飾られる場合であった。これまでの日本社会においては、仏壇や仏壇のある仏間が、家における死者と生者との接点として特別な意味をもってきた。特別な〈場〉であるからこそ、死者の写真をその部屋に飾ることに意味があるのであろう。ならば、仏壇のない部屋に死者の写真を飾ることの意味は何であらうか。

そこで、仏壇のない部屋で飾られている109枚の事例に注目してみよう。まずそのような写真が飾られる部屋は居間が多く、他に寝室なども含めて日常生活において長時間過ごす場所であった。部屋の中で飾られる場所は壁に貼る（57枚）が最多で、次に多いサイドボードや食器棚、本棚などの中や上（41枚）と併せると九割を占めている。それ以外は、テレビやピアノの上、出窓などであるが、ともかく生者が日常生活を送る上で、しばしば目が行くような場所に飾られている。仏間や仏壇などに飾られている死者の写真と比較するなら、生者との距離が、現実的にも心理的にも非常に近いところに飾られているといえることができる。

ではそのような写真に対して、人はいかなる関わりをしているのであろうか。仏壇を通じた死者への関わりを考えるなら、そこには供物を献ずること、「お勤め」などと称し、声に出すか否かは別にして、何らかの〈祈

り〉をすることの二点があげられる。そこでこれを参考に、まず死者の写真に供物を献じるか否かをみると、これを行うのは半数あまりの56件(51.4%)であった。仏壇に飾られた死者の写真に対して75%が供物を献じていることと比較するなら、あまり多いとは言えないが、おそらく写真の飾られた場所の問題も作用しているものと思われる。献じられる供物について見ると、ご飯・水・茶・花・菓子・果物・コーヒー・パン・コーラ・煮染め・みそ汁・線香・ドッグフードなどが確認された。多くのものは仏壇に供えられる供物と共通するが、仏教では避けられるはずの生臭物を供えたり、コーヒー・パン・コーラといった西洋風なものを供えることは、当事者の個人的想いから死者の好物が供えられているものと思われる。またドッグフードは、ペットとして飼っていた亡き愛犬に対する供物である。ペットの死に対する現代日本人の感覚は注目すべきで、人間の死者と同一感覚、あるいはそれ以上の感覚から対応されることも珍しくない。

次に〈祈り〉に関しては、22枚(20.2%)のケースではとりたてて何も行っていなかった。それ以外では何らかの〈祈り〉がなされていたが、詳細の明らかなものに限ってその内訳を示すと〈表〉のようになる。これよりまず、写真に対する人々の〈祈り〉にはタイプ①③④⑫のように常に一つの〈祈り〉のみを行うものが65.1%見られるのに対し、残りは複数の〈祈り〉を時に応じて選択的に行っていた。

この〈表〉で注目すべきは、死者の写真に対して最も多くなされる〈祈り〉が「祈願」だという点であろう。「祈願」を含むタイプ①、⑤～⑦、⑨、⑫の関わりで、〈祈り〉の内容別総数の35.6%を占めていたのである。そこでなされる「祈願」の内容を具体的に示すなら、亡くなった祖父母の写真などに孫の高校合格を、あるいは家族の健康を、そしてまた商売繁盛を祈るといった、いわばこの世に残された生者達の生活が巧く行くように

〈表〉 死者の写真への〈祈り〉

タイプ	祈願	供養	報告	挨拶	お経	なし	
①	○						32
②						○	22
③			○				8
④				○			7
⑤	○		○				7
⑥	○		○	○			6
⑦	○				○		5
⑧			○	○			5
⑨	○	○	○				5
⑩		○		○			4
⑪	○		○		○		3
⑫		○					2
⑬		○	○	○			2
⑭		○	○				1
	58(35.6)	14(8.6)	37(22.7)	24(14.7)	8(4.9)	22(13.5)	109

と願われる「現世利益的な祈り」ということができる。

ここから明らかになる、死者の写真に対して供養的な関わりをするのではなく、それを祈願対象としているという点は興味深い。ちなみに供養的な関わりである「供養・追悼」と「お経」を併せても、18.4%でしかないのである。実はこの傾向は、仏壇のある部屋に飾られる写真への関わりにも同様に見られることである。ここでは「供養」と「お経」の合計は22件(13.5%)で、その倍以上の48件(29.4%)もの「祈願」がなされていた。

『先祖の話』などにおいて祖先祭祀の問題を取り上げ、日本人の神観念や死生観の追究を行ってきた柳田國男の場合、我が国において先祖は最終的にカミになると指摘していたが、それはあくまで三十三回忌などの「弔

い上げ」以後のケガレがとれた状態を指していた。ところが今回の調査で対象として取り上げた写真の多くは、実は「弔い上げ」以前の死者の写真であって、それがカミ的に扱われて「祈願」対象として飾られていたことが明らかになったわけである。

4. おわりに

見てきたように、仏間以外の部屋に飾られている死者の写真は、残された生者の日常生活の中にすっかり取り込まれて生活を共にしており、時には祈願対象となって生者の生活を守ってくれるカミ的存在と見なされていることが明らかになる。写真を通じた死者と生者とのこのような関係が、一体いつから始まったことかは明らかでない。しかし、家庭の中での死者との接点が、仏壇に安置された位牌中心になされてきたこれまでの日本の生活様式の中からはなかなか見えにくかったことは確かである。⁽⁹⁾ 写真という現代社会の“新しいメディア”を通じた死者と生者の接点であるからこそ、仏教教義からの対応がなされる以前に、既に、庶民の間で自由な形で死者と生者との関係が取り結ばれることになったものといえよう。

このような形で、遺影を身近に飾る中でなされる死者への祈りが今後どのような形で展開していくかは明かではない。とはいえこれまでの民俗仏教のさまざまな形態を考えてみるなら、生者にとって死者は、生前と同じ姿形をとる人格的存在と考えられることが多い。幼くして亡くなれば幼く、老齢で亡くなれば歳をとった姿でと。その意味からするなら、故人の生前の姿が保存されている写真は、そのようなイメージを具現化する打ってつけのメディアであることは間違いあるまい。近年、使い捨てカメラやカメラ付き携帯電話の急速な普及により、われわれの周りでは、写真を撮ると

いう行為が非常に手軽な時代を迎えている。それに従いプリクラの流行にみるように、撮られた写真もまたおとなしくアルバムに整理される扱いだけではなくなってきた。写真という新しいメディアの普及は、民俗仏教における祈りの問題に新たな切り口をもたらししており、とりわけ民俗仏教における死者観念の問題に新たな角度からの再考が求められているものといえよう。

注

- (1) 姉崎正治「中奥の民間信仰」『哲学雑誌』第130号, 1897年, p. 996。
- (2) 佐々木宏幹「生活仏教の諸相—宗教人類学的視点から—」『宗教研究』327号, 日本宗教学会, 2001年, p. 42。
- (3) このような観点は、楠正弘の提唱する信仰動態の考え方に触発されたものである。楠正弘『庶民信仰の世界』未来社, 1984年および楠正弘「動態信仰現象学序説」同編『宗教現象の地平—人間・思想・文化—』岩田書院, 1995年, 参照。
- (4) 石井研士『データブック現代日本人の宗教』新曜社, 1997年, pp. 6-7。
- (5) この調査は、筆者が研究代表を務める科学研究費補助金による共同研究「死者と追悼をめぐる意識変化—葬送と墓についての統合的研究—」（基盤研究（A）：課題番号14201004）の一環として、（社）新情報センターへ委託して実施された。この研究の報告書は上記課題名のもと冊子にまとめられ、平成17年3月に刊行された。
- (6) 近年、墓を作る際に仏教の教義の影響がどの程度希薄化しているかについては、以下で報告したことがある。鈴木岩弓「墓碑銘からみた現代人の死生観と仏教」『日本佛教學會年報』第63号, 日本佛教學會, 1998年。
- (7) この調査で対象とした「人物写真」の「人物」には、本人にとっては人間と同等かそれ以上の存在と考えられているペットの動物をも含むものとして調査している。
- (8) 筆者の子供の頃の記憶では、家の中に人物写真を飾る場合には、映画俳優やスポーツ選手のポスターを除けば、死者の写真に限られていたような感がある。これがいつ頃から、また如何なる契機で家族などの生者の写真を家庭内に飾るようになったかは、興味深い問題である。このことについては、家族社会学的観点も加味しながら別稿で論じる予定である。

- (9) 先頃の中越地震の際にも、家から避難する人々が位牌を持ち出す場面がニュースで報道されていたが、従来、位牌は死者の依り代としてみず最初と考えられる存在であったといえよう。